
恋に愛されない男

神越優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋に愛されない男

【Nコード】

N2344D

【作者名】

神越優

【あらすじ】

冬、細く細く長い道。そこを歩く一人の男。彼は歩いてきた道を振り返る。人生という、長い道を・・・その先にある分かれ道を、彼は選ぶのか・・・恋愛に恵まれず、20年を生きてきた、一人の男の物語・・・

くプロローグく（前書き）

はじめまして、神越優と申します。

久しぶりに小説を投稿することになりました。

皆様のお目に止まり、大変光栄です。

さて、この小説はちょっと特殊な書き方で仕上げようと思っていきます。

主人公、その他登場人物の心情を、なるべく直接書かないように・・と。

皆様それぞれに、それぞれの印象を持っていたらいいなと思います。

その辺りを理解していただいて、拙い文章ですが、読みづらいのを我慢して頂いて読み進めていただけると幸いです。

では、『恋に愛されない男』ご覧ください・・・

くプロローグく

サクツ・・・サクツ・・・サクツ

細い細い、真っ直ぐな道。敷き詰められたアスファルトには、細い道の割りに車が通るせい、タイヤの焦げ付いた跡や、小石が散らばっている。右を見ると、地方の駅の名前の由来にもなっている川が流れていて、反対側には、全国的にも有名な会社の工場が、音も立てずに静かに佇んでいる。

川岸には、多くの木が根を張っていて、その道は数多の落ち葉に埋もれてしまいそうだった。毎朝、工場の清掃員が、壁の外周を掃除するおかげで、落ち葉は道の脇に一除けのけられている。

サクツ・・・サクツ・・・サクツ・・・

枯れ果てた落ち葉が踏まれて、その身を折られ悲鳴をあげる。それを面白そうに、寒さにより白くなった息を吐きながら、わざと落ち葉の上を歩く。

サクツ・・・サクツ・・・

立ち止まり、お気に入りのメンソール煙草を一本取り出し、口に咥えてから百円ライターで火をつける。

・・・フウウウウ・・・

すっかり白くなった吐息と、煙草の煙が混じりあい、少し乾燥してしまった唇から吐き出された後、北風に揺られて消えていく。

細く、少し垂れ気味の目をさらに細くして、雲ひとつ見えない青空を、男は見上げた。

20歳の冬、男は工場に勤めていた・・・

第一部『合コン』〜1〜

馬鹿でかい・・・それが一番適切な表現だろう。この地域の中でも相当広い敷地を持ったこの工場は、全国でも五指に入る有名なIT会社の下請けを行っている。

その工場の門前には、警備員が立っている。

「おはようございます」

警備員が言くと、男は財布から通門証を取り出し、警備員に見せながら同じく挨拶をした。

門を抜けて、しばらく歩いてから更衣室のある建物に入り、制服に着替え、彼が仕事をしている現場に向かう。

工場内には幾つもの建物があり、たくさんの社員が、それぞれの職場がある建物に入っていく。

建物の中には、小さなゲート。IDカードをかざし、暗証番号を入れるとゲートが開く。

そうして、男は職場に着き、パソコンを開き仕事を始めた。

「おはよう、相川」

男に声を掛けたのは、ふっくらした中年の男性だった。目は大きく、少し垂れていて優しい印象を持てるような笑顔が特徴的だ。

「おはようございます。立野さん。今日も早いですね」

相川と呼ばれた男は、立野と呼んだふっくらした男に微笑みながら挨拶をした。柔らかい笑顔が印象深い。細く垂れた目が更に柔らかい印象を与えるのだろう。

「相川、今日は食事会だからな！夜空けとけよー！！」

立野が少し小さめな声で、相川の肩を小突きながら囁いた。

「だから行きませんってば・・・食事会だなんて、よく言いますよ！合コンってはっきり言やあいじゃないっすか・・・」

相川の柔らかい笑顔が引きつっていた。

「ダメだダメだ！若いやつ連れて来いって言われちまったんだ！相手は大学生だぞ！年近いのはお前だけなんだ！！頼むって！凜ちゃん今夜仕事だろ？絶対ばれないって！」

立野が手を合わせて頭を下げる。

「・・・そんなの俺が行ったところで盛り上がりませんし、喜びませんよ？」

「大丈夫だつて！元ホストだろ？持ちネタいっぱいだろ？」

小さく鼻で笑った相川は、

「凜に金預けてんだから、立野さんのおごりっすよ？」
と釘をさしてから了承した。

仕事が終わわり、相川は立野と共に、駅前の居酒屋に向かって歩いていた。

工場は駅から大通り沿いに歩いて15分の距離にあった。駅から歩いてくる人や、バスで通勤する人も多いこの工場は、駅周辺で最も人口が多い職場だった。

「待たせてごめんね。紹介するよ、後輩の相川だ」

店に入るなり、立野は女の子2人が座る席に向かっていき、挨拶した。

「相川翔輝しょうきです。立野さんには半年間お世話になってます」

相川は頭を下げながら、女の子たちに自己紹介した。

デニムジャケットを羽織った、ショートカットの女の子が、

「よろしく。あたしは黒田理恵子、で、こっちが笹沼美樹。立野さんはうちの居酒屋の常連なの」

と同じく頭を下げた。

「よろしくお願いします」

笹沼と紹介された女の子が微笑んで会釈した。長い髪をウェーブさせていて、千鳥柄のワンピースに、黒のベロアジャケットを羽織っていた。目は大きく、鼻は少し潰れているが、小さめで、唇は、口紅が薄く、全体的に顔は小さいほうだった。スタイルは、少し太

っているが、肉付きがいい方で済むくらいだった。

黒田は、ショートカットの黒髪が途絶えた辺りから、大きいリング状のピアスが目立つ、少し色黒の女の子で、目は細く吊り上っている。が、キツイ印象を与えるその顔立ちとは裏腹に、口調こそ荒っぽい、穏やかな喋り方だった。

「じゃ、なに飲むのか？」

立野が笑みを浮かべながら、3人に聞いた。

「俺生ビール」

「あたしも生」

「あたしはカルーアミルクでお願いします」

「了解。店員さん、注文おねがいします。生3つ、カルーア、・・・以上で」

立野が注文を終えてすぐ、店員が飲み物とお通しを人数分持つて戻ってきた。居酒屋というのは、店によるが飲み物を持つてくるのが早いところが多い。

「じゃ、お疲れ」

立野が言ったと同時に、4人はグラスを合わせ、カッンと小さく鳴らした。

「えっと・・・お仕事はなにされてるんですか？」

笹沼が少し遠慮がちに発言した。こういう場所に慣れてない様子だった。

「ごめん、言えないんだ。企業秘密ってやつ？でも、とりあえず工場に勤めてるただの会社員だよ」

立野が少し唸りながら言った。

ガヤガヤと大勢の客が喋り合う声で、週末の居酒屋はにぎやかだった。大手チェーン会社の居酒屋というのは、どこでも見ることができるだけあって人気だった。

「相川・・・くん？だっけ？いくつなの？立野さんも」

黒田がピンク色の煙草ケースから長い煙草を取り出し、啜って火をつけた。

「俺は今年で29になったよ。で、相川は20だ」

立野が少し声のトーンを低くして、常に浮かべていた気持ちのいい笑顔を引きつらせて言った。

「うつそ?!美樹とタメ?!で、工場なんかで働いてんの?大学は?!」

黒田が立て続けにテンションを上げて質問する。

「いや、高校中退したから」

相川、いや、翔輝は煙草の煙を吐き出しながら、煙と共に吐き捨てるように言った。

「そうなんですか・・・でも、なんで?」

笹沼がグラスに口を付けながら問う。

「進級できなくて。かつたるくなつたから・・・」

「そ、で、バイトも続かなくてホストに走つたんだよな!」
待つてましたとばかりに立野が口を挟む。

「マジ?!元ホスト?!げえゝキモいゝ!!」

黒田はビールを飲み終えてから、大きな声で批判した。

「なにが?ホストのなにがキモい?」

翔輝は煙草を啜えて火を点けた。

「大した顔じゃねえくせにナルシストなとこ!女が皆カツコイ自分に抱かれたいとか思つてっからだよ!」

黒田はだんだん声を荒げて言った。

「ちよつと理恵!言いすぎ・・・」

笹沼が止めに入ろうとしたが、

「笹沼さん?だよ。いいよ。そういう奴もいるのは事実だし」

翔輝は微笑みながら煙草を吸っていた。

「ほら、あんたはそうじゃないみたいない言い方してんじゃん!自覚してねえのをナルシストっつーんだよ!」

黒田は煙草を大きく吸って、ビールをまたグイッと飲み干した。

「俺は違うよ。指名も取れなきゃヘルプもできねえからやめたんだ。この顔だからね。モテたことなんか一度もないし。な、自覚し

てるだろ？だからナルシストじゃない」

微笑を残したまま翔輝はビールを煽った。

その話を黙って聞いてた立野は声を押し殺して鼻で笑った。

「……悪い悪い。だって自分のこと卑下しすぎだからさ」
笹沼も多少引きつりながら、同じように笑った。

「そうですよ。全然カッコイイじゃないですか」

それを聞いた翔輝は、鼻で笑ってから沈黙を通した。

第一部『合コン』くく

自己紹介も終わり、他愛ない話が続く中、笹沼が声のトーンを落として、翔輝に話し掛けた。

「相川さん……ごめんなさい。理恵……前にホストやってた人に騙されて……何股もかけられて捨てられたの……だから」

翔輝は、少し俯きながら煙草の煙を吐き出した。

「……なるほどね。だからか……ん、大丈夫。気にしてないし」

それを聞いた笹沼は力無く微笑んだ。

「ねえ、立野さん。緒方さんまだなの？」

突然、黒田が声色を高くした。

「……緒方さん？」

翔輝が目の前に座っている笹沼に訊ねると、

「よく知らないんだけど、理恵が働いてる店によく立野さんと来るらしいの。合コンはその人を紹介してもらう代わりに用意したの」
笹沼は少し慣れてきたのか、既に敬語を使わなくなっていた。

「そ！あんたみたいな元ホストと違って優しくてカッコイイ大人の男！！」

黒田が翔輝を睨みながら煙草を吸った。黒田が吸っている煙草は女の子に人気のあるピンク色のパッケージでロングのメンソール煙草だ。

「理恵！いい加減にになって！相川さんに突っ掛かってどうすんの？！」

笹沼がテーブルを叩いた。

「美樹は黙ってて！元つつたってこういうやつは結局女なんかやるための道具くらいにしか思っただけなのよ！違う？！」

黒田がテーブルを叩き返した。

「まあまあ。黒田さん、相川はそんなやつじゃないから」

立野が間に入るうと黒田を宥める。

「女はやるための道具って……んなもん逆にお前みたいな女とやるやつのがおかしいと思うけどね」

翔輝が鼻で笑った。

「……っだとしてめえ!!!」

黒田が立ち上がる。

「ちよつと理恵！相川さんも！今は……」

笹沼が口を挟もうとしたが立野に手で遮られた。

「女の子に失礼なこと言ったんだ。自分でこの場を抑えてみる」

立野が翔輝を睨んだ。

「わかってますよ、立野さん。……とりあえず座れよ」

翔輝がため息をついてから煙草を手にとった。黒田は息を荒くしていたが、ドカツと勢いよく座り、同じく煙草に手を取った。

「どういうことよ、さっきの」

翔輝は大きく煙草を吸い、煙を吐き出し、話を始めた。

「グダグダ過去を引きずってる女とやりたい男なんかいねえってこと。俺だったら、自分のことだけ見てくれるやつとじゃなきゃやりたくないし。ってか本気で好きになれない。逆に聞くけど、合コン来て昔の女を引きずって当たり前散らしたりため息ばっかついてるやつを狙うか？」

黒田は少し俯いて、煙草の煙を吐き出しながら、

「悪かったわよ」

と小さく言った。

翔輝は顔を崩しながら、

「いや、こつちも失礼なこと言ってごめんと頭を下げた。」

「で、その緒方さんって人は？」

翔輝が立野の方に顔を向けた。立野は飲み物を焼酎に替えてグラスを手で弄んでいた。

「ああ、俺の古くからの友人なんだ。こっち来てからのな。もうすぐ来るはずなんだが」

「こっち来てから？」

笹沼が首を傾げた。大きい瞳が目立つ顔は酒のせいか頬が赤くなっている。

「ああ、俺さ、高校出てからすぐこっちに来て今の会社に就職したんだ。で、その時に同じアパートに住んでたのが緒方なんだ。年も同じだから気が合ってたさ」

立野が酒を口に運びながら説明した。

「・・・じゃあ、人数合ってるし俺が来る必要なかったんじゃない？」

翔輝がまた煙草に火を点けた。

「あ、今日3対3だから。帰っちゃダメよ！」

黒田が翔輝に顔を近付けていった。翔輝はすかさず顔を引いた。

「・・・なんかあの二人、最初の雰囲気どこへやらって感じですね」

笹沼が引きつった笑顔を浮かべた。

「元が気が合うんだらうね？似たもん同士っていうか」

立野も苦笑を浮かべている。

「全然似てないと思うんですけど・・・」

「性格じゃなくて・・・過去が、さ」

立野は言い切ってから追加の注文を頼むために店員を呼んだ。

「過去・・・？・・・騙された？相川くんも？」

笹沼は、隣で言い合っている黒田と翔輝を見ながら呟いた。

第一部『合コン』く3く

「すいません、ちょっとお手洗い・・・」

「あ、あたしも！化粧直すから！」

笹沼が席を立つと、慌てて黒田も席を立った。

居酒屋は化粧室が重要な役割を果たしている。

食事をする時は賑やかでもいいが、用を足すときは、清潔で、静かなところを希望するのが人間の性だ。羞恥心がある人間なら誰でも騒がしいところでは落ち着かないものだ。特に、化粧などを行ったり秘密のお喋りなどを行う、女性は特に。だからこそ、この居酒屋は奥、見つけにくいところに設置してあるものの化粧室を広く、綺麗にをモットーにしていた。なのでとても女性に人気のある店だった。

「美樹、で立野さんはどうなの？立野さんはあんたを紹介してくれって言ったから合コンにしたのよ？」

黒田がアイラインを整えながら笹沼に問い掛けた。

「・・・つとにさあ・・・あんな中年、こっちは勘弁だつて！なんなのあいつ？！ニコニコしてるだけでつまらないし！まだ大手会社の会社員つてのが救いだけだね！」

笹沼はファンデーションを塗り直しながら吐き捨てた。

「じゃあなんであんたあんなキヤラ必死に作ってんのよ？いつも気に食わなくなるとすぐ本性出すくせに・・・」

鼻で笑いながら黒田はチラッと笹沼を見た。

化粧している笹沼の表情はぶくつと頬を膨らませている・・・ではなく、口の端を吊り上げ、声を殺して笑いながら、その目の端で黒田を捉えている、先程の柔らかでおしとやかな表情はそこにはなかった。

「・・・あんだ、バカじゃないの？さつき相川とかいうバカはあ
あ言つてたけど、結局男は女なんかただの穴にしか見てないんだっ
て。だからこっちも騙されないようにキャラ作って一歩下がって冷
静に品定めすんの！抱かせてやる価値があるかどうかをね」

笹沼はフツと鼻で笑い、黒田の方へ向き直した。

「でも、あいつの言うことわかるよ？たしかにあたし男だったら、
さっきのあたしは好きにならないし・・・なんか直に言われて嬉し
かったし。立野さんだっていい人だと思うし」

黒田も化粧の手を止め、笹沼の目をじつと見た。

「だからあんたはホストなんか騙されんのよバカ！あいつは好
きにならないって言っただけ！男が皆やりたくないとは言つてない
！言い包められたのよ！わかんなかったの？！」

笹沼は堪え切れなくなったのか、急に声をあげて笑いだした。

「・・・あつそ！どうせあたしはバカだよ！あんたみたいに六大
なんて絶対行けないからね！」

黒田が勢い良く口紅を洗面所に叩きつけた。

「・・・ま、あんだのそういうところが好きだから友達やれんだけ
どね。あたしはこんなんだから、単純でバカなやつにしか本音言え
ないし・・・」

笹沼は黒田の口紅を手に取り、弄んだ。

「・・・ま、いいよ！で、結局あんた今日どうすんの？まだ猫被
ってんだからどっちか狙つてんでしょ？」

笹沼の手から口紅を奪い取り口に当てながら、黒田は小さく笑っ
た。

「ん、まあカッコよくないけど中年より元ホストかな。仕事は同
じなんだし。金がそこそこあんならそりゃ若さとSEXが上手い方
でしょ。それに、後から来るやつはあんだのでしょ？」

笹沼は手を洗いながら冷たく言い放った。

「ありがと。でも、あんだの友達どうすんの？後から来んのはい
いけど、別行動すんでしょ？来てすぐ解散になるじゃん？」

黒田も同じように手を洗う。

「ん、あの子はいいの！家近いから呼んだだけ。いい男いなかったら泊まろうと思って。あの子さ、もう男作らないし」

「・・・なんで？」

笹沼は黒田を無視して、突如俯いて呟いた。

「相川も過去・・・か。あの子もこの子も過去があれだから・・・相川の過去知つとく必要ありそうね」

「え、なにそれ？」

黒田は聞き返したが、

「うつん、なんでもない！行こ？待ってるよ！」

と、にこやかな笑顔ではぐらかされた。

第一部『合コン』く4

「で、どうだ？」

立野が2杯目の焼酎、緑茶割りを口に運んだ。

「どうってなにがですか？」

翔輝が三杯目の生ビールを煽りながら答える。

「理恵子ちゃんと笹沼ちゃんだよ。どっちか気に入ったか？」

翔輝は目を大きく見開いた。わかりやすく言えば丸くしたというやつか。

「俺は人数合わせでしょ？ 気に入るも糞もないじゃないっすか！」

立野がおかしそうに笑う。

「人数合わせでもせっかく合コン来てるんだ。誰かと仲良くならないともったいないじゃないか」

「そんなの凜が許さないっすよ」

翔輝が鼻で笑いながら煙草に火を点けた。

「・・・お前さあ、凜ちゃんと別れられないのか？」

立野がグラスをテーブルに置いて、真剣な眼差しを向けた。

「別れられたら・・・こんな人生歩んでませんよ。今だって、ホストやってたかもしれないっすからね」

翔輝は少し俯いて小さく笑った。

「そう・・・だよなあ・・・でもさ、もしお前が誰か好きになって、その子と一緒になりたくなったらどうすんだ？」

「それはないっすよ。もう俺はあの子以上好きにならない。あの子を忘れられないんすから・・・凜と付き合ってから、ますますその気持ちが強くなって、今の凜といえるのは苦痛ですけど・・・逃げられないって事実があるおかげで、あの子を忘れられますからね」

「・・・いつも話してる子か。わかったよ！ 緒方ともう一人が来たら、すぐお開きにしよう。もともと、お前の為だったからな、この合コンは。まあ、理恵子ちゃんが緒方を気に入ってたから、その

気持ちは優先するけどね」

翔輝はまた小さく鼻で笑った。

「・・・なんか一言欲しいっすね、そういう時は」

「先に一言言ったらお前断るだろ？だから笹沼ちゃんを紹介してくれて嘘ついて合コン組んでもらったんだ。で、一人あぶれるようにすればお前は断れないだろ？」

立野は口の端を吊り上げて笑った。

「そんなこと言っただんすか？じゃあ向こうは・・・」

「あのぶりっこ、今頃中年に気に入られてキモイとか言ってるんじゃないか？」

翔輝は頭を抱えてため息をついた。

「立野さん・・・」

立野は含み笑いをしながら、

「まあいいじゃないか。適当に緒方を紹介して帰ろう」と言ってからグラスの中の緑茶割りを飲み干した。

第一部『合コン』４（後書き）

今回は短めに終わりました。早くも百人近くの方に御覧になって頂いて、とても光栄です。少しずつ話は展開してきてますが、まだ本題には全然入っていません。先は長いですがお付き合いいただけると幸いです。感想・評価など、まだ話が短く、つけずらいと思いますが、なにか一言いただけると嬉しく思います。では、これにて失礼させていただきます。

第一部『合コン』〜5〜

「ごめん、お待たせ」

黒田と笹沼はそれぞれ鞆を手に持ったまま、席に着いて、飲み物を飲んだ。

「緒方さんは？まだ来ないの？」

黒田が立野に話を振った。

「うん、まだ連絡はないね」。残業が多い職場らしいんだけど立野が携帯を開きながら言った。

「そつかぁ・・・ねえ、美樹？美樹の友達はいつ来るの？」

黒田は煙草を鞆の中から取り出しながら言った。

「ええと・・・今大学からこっちに向かつてるってメール入ってた」

笹沼が携帯を操作しながら答えた。

「もう一人は大学生？」

緑茶割りの入ったグラスを傾け、中の氷をグラスとぶつけて遊びながら、立野が訊ねる。

「うん、美樹と同じ大学の子。この子すっごい頭が良くてさぁ！六大学の内の一つに通ってんのよ！経済学部」

「・・・すげえじゃん。で、黒田さんと笹沼さんはどういう関係？なんかさつき年違うみたいない方だったし、大学も違うみたいな言い方じゃん？」

煙草を吸いながら、顔を少し歪めて翔輝は言った。

「ああ、理恵はあたしの高校の時の部活の先輩。テニス部のね。あたし、高校は公立で、一生懸命勉強して今通ってる私立の大学に行ったの。将来やりたいことあったからね」

微笑みながら笹沼が答えると、翔輝は頷きながら煙草を吸った。

「そういえば、相川。お前も頭良いんだよな？結構頭良い私立大学の付属だろ？お前の高校？」

立野がニヤニヤしながら翔輝の頭を小突く。

「やめてくださいよ・・・所詮中退なんすから・・・」

翔輝が頭をさすりながら、また顔を歪める。

「そうなの？ 凄いじゃん！ 元ホストのくせに」

黒田もニヤニヤしながら翔輝の頭を小突いた。

「もう、理恵！ やめなつて！ 相川さん困ってるじゃない！」

笹沼が黒田の手を掴んだ。

翔輝は、煙草を灰皿に押しつぶして、

「ちよつと便所」

と残して、足早に席を立った。

「ねえ、立野さん。さっき言つてた相川さんの過去って？」

翔輝が化粧室の方へ消えていったのを見届けた笹沼は、すかさず立野に真剣な眼差しを向けた。

「ん？ ああ、相川ね、昔凄い好きだった人がいたらしいんだ。

でもね、色々あつて、結局実らなかった。それだけだよ」

立野は新しく頼んだ日本酒の熱燗を美味そうに啜った。

「色々？ 色々ってなんですか？」

笹沼が更に問い詰めようとした時、

「あの、遅れてすいません・・・」

大きな目、日本人には珍しい、彫りの深い顔立ち、唇は小さく、髪は長く、綺麗なストレート・・・美人と形容できる顔立ちとは裏腹に、グレーのパーカーの上に黒のダウンジャケット、ブーツカットのデニムパンツと、ラフな格好で身を整えた、少し幼さの残る女性^{せい}が3人の前で頭を下げた。

「亜由美！ 遅いじゃない！」

笹沼は頬を膨らませて大声を上げた。

「^{おかざりあゆみ}岡里亜由美です。遅れてすいません」

紹介された岡里は、もう一度立野に向かって深々と頭を下げた。

「ああ、どうも。立野祐一です。よろしく。こっちはまだあと一

人来てないんだが、もう一人は今お手洗いに・・・ああ戻ってきた。紹介するよ。相川だ」

立野がにっこり笑って、化粧室から戻ってきた相川を岡里に紹介した。

翔輝は目もくれず、煙草を咥えて、ライターで火を点けた。

「相川・・・翔輝・・・？」

フルネームで呼ばれた翔輝は、顔を上げた。その口からは煙草が零れるように落ちた。

「岡里・・・」

翔輝と岡里はお互い、目を見開いたまま、止まっていた。

第一部『合コン』く6く

翔輝は丸めて席に置いてあつた黒のロングコートを掴んだ。

「俺帰ります。立野さんご馳走様でした」

視線を下に向けたまま、足早に立ち去ろうとした翔輝だったが、立野に腕を掴まれて立ち止まった。

「ダメだろー全員揃つてもいないのに帰っちゃ。それに岡里さんに失礼だろ？さあ、座れ座れ」

翔輝が立野の顔を見ると、立野は満面の笑みを浮かべていた。翔輝は大きいため息をついて、席に座り、煙草を咥えて、火を点けようとしたが、何を思ったか、咥えた煙草をそのままケースに戻した。

「なにやってんだ、お前？」

立野が不思議そうに目を丸くしたのと、笹沼が、ほんの一瞬だったが眉間に皺を寄せたのは、ほぼ同時だった。

「私が煙草の煙苦手なの覚えてたんだ」

岡里が翔輝を見据えたまま、口を開いた。

「吸いたくなくなっただけ」

翔輝はボソツと呟いた。

・・・パンツ！！！！

乾いた音が鳴り響き、翔輝の頬は赤く腫れ、岡里は息を荒くしていた。

「え、ちょ・・・」

・・・パンツ！！！！

黒田の静止の声を遮って、また岡里の平手打ちが翔輝の頬に炸裂した。

「なに考えてんの！あたしがどんな気持ちでいたかわかってんの？！」

岡里の大きな瞳は、透明な雫で今にも溢れそうなほど潤っていた。

「・・・知らねえよ・・・お前の気持ちなんか・・・わかんねえ

よ・・・」

翔輝は目の端で岡里を捉えながら、呟いた。

「知らねえ?! ふざけないでよ! あたしがどれだけあんたを探したか・・・あんたの高校の友達にあんたの事聞かためだけに、あたしはC大受けたのよ? あんたが中退してることもそこで知ったし、あんたがホストやってるって聞いたから新宿だっけ行ったし! でも、全然見つからなかった・・・どんだけ心配したと・・・」

「ハイ、ストゥップ」

更にビンタを翔輝に放とうとした岡里の腕を、綺麗に黒髪を整えた、中年男性が掴んだ。無精髭が目立つ顔には、引きつった笑顔が浮かんでいた。

「慶介!」

「緒方さん!」

立野と黒田の声は、ほぼ同時だった。

「綺麗なお嬢さん? 皆驚いてるよ?」

緒方は立野の方をチラリと見てから、岡里に視線を向けた。

周囲の人々は、何事かと翔輝達の席の方をチラチラ盗み見ている。

居酒屋特有の喧騒は、今はなかった。

「・・・すいません、取り乱して」

岡里は翔輝をもう一度睨んでから、席に座った。

翔輝はずっと俯いたまま、一言も喋らなかった。

「出ようか? この店にはさすがに居辛いだろ?」

立野が伝票を持って、コートを羽織りながら言った。

一同は無言で立野に続いて、帰り支度を始めた・・・

第一部『合コン』〜6〜（後書き）

今回も短めに終わらせました。

次回、第一部最終話の予定です。
第二部からが、本編となります。
皆さん、お付き合い下さい。

第一部『合コン』〜7〜

「ありがとうございます」

食後の板ガムを全員に配り、頭を下げた居酒屋の店員は、一同をチラチラ見ながら仕事に戻って行った。

「で、なにがどうなったんだい？」

緒方はガムを口に入れながら立野に問いかけた。

「いや、俺も訳わからん・・・岡里さんは相川と知り合いなのか？」

立野が眉に皺を寄せたまま、岡里に顔を向けた。

「ええ、中学の時から知り合いなんです。同じ塾だったんですけど、高校行つてからも連絡は取っていて・・・」

岡里は俯いたまま言った。

「それで・・・突然連絡が途絶えて・・・心配になって色々心当たりは当たってみたんですけど・・・見つからなくて・・・」

「諦めかけていたら見つかった・・・と？」

緒方が岡里の顔を覗き込むと、岡里は鋭い目で翔輝を睨みながら・・・泣いていた。

「つまり・・・元恋人？」

黒田がニヤニヤしながら翔輝を小突いた。

「・・・違う」

翔輝はそれだけ呟いて、足早に帰ろうとした。

「また逃げるの?!」

岡里の怒鳴り声が、翔輝の足を止めた。

「なんでよ?! あたしがなんかした?! そりゃ・・・色々あったけど、避けられるようなことしたつもりないよ?! なんかあんなら言つてよ・・・謝るから・・・避けないでよ・・・」

堪え切れなかったのか、岡里はしゃくり声を上げながら涙を零して泣き始めた。

「ごめん、岡里・・・でも、ごめん・・・」

翔輝はそれだけ言い残して、岡里の方を見向きもせずに歩き始めた。

「相川・・・くん！待って！」

笹沼は、ちよつと困ったように岡里をチラリと見たが、黒田に、「後で連絡するから！亜由美よろしく！」

と残して、翔輝の後を追った。

「美樹・・・マジかよあいつ・・・」

黒田は頭を掻きながら、咽び泣いている岡里を見下ろした。・・・マジ泣きだった・・・

「これは・・・どうすればいいんだろうねえ・・・？」

緒方が立野の肩に手を乗せてため息をついた。

「・・・どつか違う店に行くか、とりあえず・・・ほつとけないし・・・」

立野も同様にため息をついた。

「ちよ・・・待って！」

笹沼は翔輝に追いつくと、翔輝の腕を掴んだ。が、それを気にも留めず、翔輝は強引に歩き続けようとする。

「待ってってば！」

グイッと、弱い力を振り絞って、腕を引くと、翔輝はやつと立ち止まり振り返った。

「なんか用？」

翔輝はため息をつきながら笹沼を見た。何の感情も読み取れない、冷たい表情で。

が、それを見た笹沼は、鼻で笑った。

「・・・とりあえず、どっか行きましょ？飲み足りないでしょ？」

突如態度を変えた笹沼に、少し驚いたように目を見開きながら、翔輝は笑った。

「猫かぶるのはやめたわけ？」

見下したような翔輝の視線を正面から受け止めて、笹沼は満面の笑みを浮かべた。満面の・・・悪魔のような・・・笑みを。

「あんたには意味ないでしょうが。中年がいたから猫かぶってただけよさつきは。で、行くの？行かないの？」

笹沼は翔輝の腕を抱きかかえた。自分のふつくらとした胸に当たるように。

「気持ち悪いんだよ、そういうの。ただ話すだけなら行つてやるでも、色仕掛けみてえなことはやめる。な？」

翔輝は笹沼の胸倉を掴んで、ガンを飛ばしながら吐き捨てた。

「聞きたいことがあるの・・・わかってたんだ？」

笹沼は翔輝の腕を振り払って、笑みを浮かべた。

「じゃなきゃお前みたいなのが一人の男にそんな執着しねえだろ？」

翔輝は煙草を取り出して、一本啜えた。

「じゃ、行きましょ。相川くんの好きな店でいいわよ。話聞く代わりにあたしがおごるわ」

翔輝の腕を掴みながら、笹沼はまた笑みを浮かべた。

「なら、すぐそのBARでいい。よく行くんだ。静かだから落ち着く」

翔輝は駅前のドーナツ屋の上にある、BARを指差した。笹沼は黙って頷き、翔輝の腕を引っ張りながら歩き出した。

「で、なにが聞きたい？」

翔輝はウイスキーの入ったグラスを傾けながら、煙草を一口吸った。

「岡里亜由美は元カノ？」

「違う」

カクテルグラスに入った色彩が美しいカクテルと、その中に添えられたチェリーを恋しそうに笹沼は見つめている。

「じゃあ、セフレとか？昔の客とか？」

「お前、さっきの話聞いてなかったのか？」

翔輝はまた、深いため息と共に、煙を吐き出した。

「だって、さっきのは明らかにそういう感じでしょ？女が振られて、未練タラタラって感じ。それで、それをあっさり突き放す遊び人の男！」

ズバリでしょ？と言いながら笹沼はいやらしく微笑んだ。上着を脱いで、アルコールで頬を赤くしている彼女は、艶やかで色っぽかった。

「振られたのは俺だよ」

「えっ?!」

笹沼は目を見開いて翔輝に詰め寄った。

「どういうこと？」

「くつつくな、うっとうしい！」

翔輝が、笹沼の肩を優しく押して、突き放した。口調は冷たいが、彼の行動には女性に対する優しさがあった。

「ねえ、どういうこと？もし亜由美があんたを振ったなら、どうしてあの子があんたを追っかけるのよ？」

「知らねえよ」

翔輝は俯いて、ため息を吐いた。

「酒」

「えっ？」

翔輝がフツと鼻で笑ってから微笑んだ。

「酒、おごってくれたからな。話してやるよ。なにがあったか」

可愛さと、優しさが垣間見える中、切なさも同居している、そんな笑顔だった。

第一部『合コン』〜7〜（後書き）

これにて、第一部は終了です。ここまでお読みいただき、ありがとうございます。久しぶりに小説を書いたもので、読み返してみると、ひどいな・・・と思いましたワラ

さて、第二部ですが、翔輝の視点で、彼の過去を語ることにします。

冒頭で、なるべく登場人物の心情を描かないと書いた理由がここにあります。

この小説は、過去を語る時のみ、彼らの心情を描き、その後、彼らがどういうストーリーの展開を見せるか、推理小説のように書き進めていきたいと思っていますので。

では、今回はこの辺で失礼させていただきます。

第二部『過去』～プロローグ～（前書き）

ここから第二部です。

まずは、プロローグとして、短めにしてあります。

翔輝の話し口調で綴っておりますので、多少違和感があるかも・・・
申し訳ありません。

第二部『過去』〜プロローグ〜

んつと・・・なにから話せばいつか・・・？ん・・・じゃあ、俺が、昔、どんなやつだったかって話から・・・かな？それでいいか？

『ん、いいわよ。最後は亜由美との話に繋がるんでしょ？』

ああ、もちろん。その為に話すんだからさ・・・

昔、つつても、まあ、小学生ぐらいだから10年前くれえ？かな。俺さ、いじめられっ子だったんだよ。典型的な、ね。仲良い幼馴染のやつが、結構リーダー的存在でさ。いるじゃん？そういう奴。で、そいつ中心にクラスほぼ全員からさ、まあ、そんな今のいじめみたいに自殺するほどじゃなかったけどな。

で、当然それは中学入ってからも続いたわけ。小学校の頃は男が中心だったんだけど、中学からは女が中心だったなあ。つつても相手にしてねえんだけどさ。ただ、キモイとか言われてただけ。ま、実際キモかったしな。取り得つつつたら、そこそこ成績が良かったくらい？服装も気い使わなかったし、運動神経最悪。しかも顔はこのとおりってわけだ。で、喧嘩も弱かったからさ、親もいじめられないようにって格闘技やらそうとしたんだけどさ、根性なくて続かねえんだよ。

まあ、そういう感じで、ろくに恋愛とかもしなけりゃ、女と喋ることなかったんだよ。女に興味はあったけど、そんなんだったから誰かとイイ感じになることもなかった。ここまではOK？

『ん。想像つかないけどね。たしかにイケメンってわけじゃないけど、そんなキモイってことはないと思うよ』

ハハ、ありがと。まあ今はそういうのが・・・なんつつーか・・・トラウマ？になってさ、オシャレとか気を使うようになったから少しは見えるんじゃないかな。

ともかく、まあ、運動神経も悪いってさっき言っただろ？でも、俺バスケツトボールだけは凄い好きでさ、高校行ってもやりたかったわけ。上手いわけじゃなかったんだけど。

で、そのために行きたかった高校がC大付属。まあ、私立大学付属だけあって、成績良くなきゃ入れなかったんだけど、その代わり、入った後は、大学にもストレートで行けるは、専用の体育館があるから、遅くまで練習できるわで、バスケやるためだけに高校行きたかった俺にとっては最高だったんだよ。あの学校。でも、中学の時の俺は、さっきも言ったけど、そこそこ頭良かったんだ。でも、とてもじゃないけど、入れなかったから、友達の親に紹介された、進学塾に通う事になったんだ。親に言われて、さ。で、そこで出会ったのが・・・

『亜由美？』

・・・そういうこと。

第二部『過去』く2く

俺は中1の時から塾に入ってさ、一番下のクラスから始まったんだ。で、元々頭は良かったんだろうな。どんどん上のクラスに上がっていった。中2で一番上のクラスになった。だから、全然友達作る間もなく上がっていったもんだから、そのクラスでも友達はいなかったんだ。で、そこに入塾してきたのが、岡里だったんだ。

『で、一目惚れってやつ？』

ん、一目惚れってやつ。だってさ、さっき見て思ったけど、ホントあいつ綺麗じゃん？

『まあ、女から見ても綺麗だとは思っけど』

ん、そう思うよ。で、しかも中学の時と全然変わってねえんだよ。あいつ。つまり、中学の時に既にあんな感じだったわけ！

『んゝゝゝ。恐ろしいくらいのマセガキねゝゝゝ。見た目も中身も』

そ。で、意外と子供っぽいところもあるんだよな、あいつゝゝゝ。そこがまたかわいくてさゝゝゝ

『ゝゝゝゝ』

ゝゝゝ。そんなに見んなよ。

『いや、キモイよ？なんか。さっきとキャラ違うしゝゝゝ』

うっせえな！ゝゝゝ。とにかく、まあ一目惚れしたはいいいけどさ、ほとんど初恋なわけ。どうすりゃいいかまったくわかんなかったんだよ。で、しかもそれを好きだって自覚したのもその後でさ、そんなときは可愛いなあぐらいにしか思ってたんだよ。

『ふうんゝゝゝで？』

でゝゝゝ。高校入試が終わって、塾にはほとんど行かなくなった。

元からサボりがちだったしな。

『はあ？！待って！ちよつと待って！なんもなかったの？中2で出会って、そこから入試まで1年ちよつと！あんだ気に入ってたんでしょ？！なんもなかったの？！』

・・・なんか黒田みたいになってるぞ？喋り方。

『そんなのどうでもいいのよ！元からこんなだし。ってかあんたアホ？！気に入った相手と喋ったりしないなんてどんだけシャイボーイぶってんの？！』

だから言っただろ！初恋みたいなもんだっだし、自覚もそんなときはまだしてなかったんだ。たいして、他人に興味もなかったし。塾行っても勉強するだけで、他の奴とは一切喋ったことなかったよ。

『・・・嘘でしょ？一切って・・・どういう中学生だったのあんた・・・』

ま、ともかく・・・それで、高校受かったことがわかって、久しぶりに塾行っただ。先生に報告するためにね。で、授業はまだやってたから、とりあえず報告した後、授業を強制的に受けさせられた。

授業終わった後、帰ろうとしたら、あいつに呼び止められたんだ。受験全員終わったから、今度皆で打ち上げやろうってな。で、そんなときにあいつが携帯の番号とアドレスを聞いてきたから教えた。そこで初めて、あいつと仲良くなったかな。

『・・・あの子から？あの子そういう企画とか、男に自分から誘ったり、番号聞いたりとか絶対しないけど？』

昔は、結構明るい子って印象あったけどな。よく笑ってた。大人びてるけど、笑うと幼いって感じで、ホントそれが可愛かった。あいつの笑ってる顔、なんかすっげえ好きだった。

『あの子・・・全然笑わないけど・・・』

そうなのか？今、どんな風に変わったかは知らないからな・・・なんかあったのかな？まあ、そういうわけでクラス6人で遊びに行っただ。ボウリング行ったりな。で、ちょっとあいつと仲良くなつて、結構そんなとき色々喋った。他の奴は全員男だったんだけど、なんか俺怖がられてたらしい。

『まあ、その顔でネクラじゃねえ・・・完っ全にヤンキーにしか見えないわよ』

お前・・・黙って聞いてろよ・・・

『ホラ、睨むと怖い！どう見てもヤンキーだったんでしょ？中学の時は』

・・・うるせえ。いじめられてたからその反動で、ちよつとグレたぐらいだよ・・・

『やっぱり・・・それで？』

で、俺が怖いから誘うのやめよって言われたけど、黙って誘ってたって言った。同じクラスだから仲良くしたかったって。でも、話し辛かったから、打ち上げで仲良くなれたらって。それ聞いて、すっげえ好きだと思った。そんなこと言われたこと・・・なかったからな・・・

『・・・』

それから、たまにメールしたりするようになったんだけど、告るとかはできなかったな。遊ぶ誘いもできなかった。

・・・高校入ってしばらく経ってから・・・俺らの関係は、変わった。

第二部『過去』くくく（前書き）

お久しぶりです。神越優です。

だいぶ間を置いての更新となり、真に申し訳ございません。

実は、私の苦手とするジャンルである、恋愛物であり、新しい試みをと決めての本作品の連載だったため、自分で書きながら、なんてつまらない作品なんだろう・・・と思い、連載を中止しようかと思っていました。

ですが、評価・感想こそないものの、全く更新しなかったこの1月。本日確認したところ、100ものアクセスがありました。

継続して読んでくださってる方は少ないのかもしれませんが、私にとってこんな嬉しい事はございませんでした。

よって、本来考えてたものよりは短く書き終えるつもりですが、連載を再開しようと思った次第です。

どうか皆さん、とんでもない駄作になってしまいました。何卒お付き合いくださいませ。

第二部『過去』く3く

んんん．．．あれは、俺が高校入ってすぐ．．．だったかな。バス
ケ部に入った俺はさ、中学の時にバスケ部だったっていう女の子と
仲良くなって、すぐ好きになったんだ．．．あいつとは打ち上げ
以来仲良くなることなんて想像できなかったからさ。ちょっとヤン
キーみたいなのに憧れてるところがあつたその子の方が上手くい
きそうだったから、諦めようと思ってたんだ。

『．．．なっさけな！』

．．．そう言うなよ．．．でも、ちょうどそんな時、色々あつてさ、
俺だいぶへこんでて、女と付き合うとか考えられなくなったんだ。

『色々？．．．なによそれ？』

．．．まあ．．．それはまた別の話だから．．．で、そんな時、
突然、岡里からメールが来たんだ。

『あら？急展開じゃない？』

「遊びに行かない？」

それだけだった。わかるか？！それだけだぜ？！別に大して喋つ
た事もない男に、いきなり - 遊びに行かない？ - とか意味わかん
くね？！でもこつちからしたらなんかドキドキしちゃってさ。とり
あえずOKしたんだ。

『．．．ホント急展開．．．でもあの子そういうところあるわよね．
．．．』

ん．．．ホントなんつか．．．無神経？！

『あはは．．．ホントそうかも．．．』

ハハ．．．まあとりあえず、それで待ち合わせして、でもあんな
テンションあがなくてさ、緊張してたつてもあるけど、さつき
の色々あつたつてやつのでいいさ。だから、あんな時間かけないで
すぐ帰ろうと思ってたんだ。やっぱ誘われたの嬉しくってさ、断れ
なかった代わりに、早く帰ろうって思つて。

『ふ〜ん・・・なんかその色々つてのが気になるけど・・・それで？』

まあ、待ち合わせ場所に着いたらさ、あいつ塾のメンバー勢ぞろいでいるわけさ。こっちからしたらハア？！って感じじゃん？！遊びに行こうってだけだったから他のやついるとも思わないしさ！マジなんか萎えちゃってさ。

『・・・そりゃ・・・あんたが勝手に期待して勘違いしただけつてもあるけど・・・ねえ・・・』

・・・まあ、そうなんだけど・・・とにかく、なんか皆でもう一度遊ぼうみたいなことになって、俺を誘わないのは、みたいなことになったらしくて、あいつがメールくれたらしいんだわ。でも、俺からしたらそんな気分じゃないわけだから、ソッコー帰ろうとしたわけ。そしたらあいつ・・・いきなり俺の事殴ったんだ。・・・グーで。

『・・・ハア？！いきなり？！あんたなにをしたの？！』

いや、帰るわ、って言っただけ。そしたらあいつ、

「皆でこれから遊ぼうって時にシラけること言わないの！へこんでるんだったら、相談してくれればいいじゃん！友達なんだから！」って言い出したんだ。・・・信じられるか？塾が一緒だっただけで喋った事もないし、ほぼメールもしない。それで打ち上げ一回やっただけで、友達！だぜ？こっちがそんなへこむほどでかいことを相談しろ！とか・・・なんだこいつありえねえ・・・って感じだったわけ。

『・・・八方美人・・・ね』

ハハ・・・そうだな。完っ全に八方美人だな。・・・でもさ、嬉しかったんだ。なんか、そんなこと言ってくれる女なんかいなかったからさ、なんか辛かったし、相談したんだ。色々・・・とさ。それから、かな・・・あいつと、結構メールするようになったんだ。それで・・・俺は完全にあいつに惚れた。もう、さつき話にでた女なんて、いいとか全く思えなくなっただよ・・・

『
．．．なるほどね．．．ドMだった．．．ってわけね
．．．お前．．．ホントキツツイ性格してんな。』

第二部『過去』 4

その日以来、俺はもう完全にあいつとのメールだけのために生きているって感じだった。部活終って、クタクタになりながらバスに乗ってさ、携帯とにらめっこ。なんて送ったら、あいつが楽しいか、そればつか考えて、でもいい感じのが思いつかなかくて、結局悩み相談とグチ。愛想つかされるんじゃないかって、ビクビクしながらそれでも送ってしまった。でも、あいつは一言だけとかばっかだったけど、必ず返事をすぐ送ってくれてたんだ。それが・・・すっげえ嬉しくて、ドンドン好きになつてくのがわかった。

『まあ、あの子は元々メール長い方じゃないからね』

うん、それは前に聞いたことがある。なんでそんなメール短いし、素っ気ないんだ？ってさ。そしたら、

「あたし、メール苦手でさ、アハハ」

ってさ。嫌われてんじゃないかって心配してた自分が馬鹿みたいだったよ。

まあ、そんな関係が一ヶ月くらい続いてさ、いつのまにか夏休みに入ってたんだけど、部活ばっかでさ、どっか遊びに誘う余裕もなかったんだ。それに、度胸もなかったんだけど・・・でも、今年もやってたけど、小江戸祭りっていうのがあるんだ。2つ隣の駅でさ。たまたま友達と行く約束をしてたんだけど、ドタキャンされてさ。ちようどそんな時、メールしてたから断られると思ってたけど、誘ってみたんだ。

『ああ、知ってるよ。その祭り。結構有名だもんね』

ああ。で、あいつの返事、割りとすぐ返ってきてさ。

「いいよ」

それだけだった。

『ア・・ハ・ハ・・・』

なんかな、嬉しかったんだけど、逆に不安になつてさ。素っ気ない

んだけどなんでOK?! みたいなの。でも、待ち合わせした場所に行ったらさ、向こうのが先に着いてて、俺を見つけた瞬間、パツと笑顔になってさ、手を振ってくれたんだ。全然素っ気なさの力ケラもなく、二人きりっていう緊張感が、余計増して、カチコチになっちまったよ。

「相川! 急だったからビックリしたよ! 誘ってくれてありがとね!」
って言いながらさ、俺の手を握って、いきなり歩き出してさ、なんかもう死んでもいいくらい嬉しかったよ。

それから、さ。俺はあいつをよく遊びに誘うようになった。嫌な事がある度に、誘って、二人で公園のベンチに座ったりしてさ、話聞いてもらってた。向こうも、だんだん悩みとか言ってくれてさ、なんかすごい二人でいる時間が好きになった。

12月、俺はあいつに告げた。なんでかは覚えてない。突拍子もなく、メールで、

「ずっと好きだった。付き合ってくれないか?」

って。あいつに彼氏がいたのは知ってた。可愛かったし、いない方がおかしいって感じだったからな。だから振られるのも覚悟してた。案の定、返事は

「考えさせて」

だった。先延ばしにして、ウヤムヤにしようって考えたと思った。でも、ホツとしたんだ。今までの、心地いい関係がなくなるのはゾツとした。友達でいいから、失いたくなかったんだ。

その後、普段どおり、あいつに呼び出されて、公園であいつの音楽の宿題を手伝ってる時にさ、あいつから告白の話を急にされたんだ。

「あたし、今の彼氏と別れた。年上としか付き合わないつもり」
なんか、落ちていくのがわかった。暗闇のどん底っつかさ。もうなにも耳に入らなかつたし、入れたくなかつた。そうなるのが分かってたはずなのに、さ。そんな自分もホントに嫌だった。

「・・・でも、付き合おうと思ってるんだ。この後・・・どうする

？」

あいつは言った。俺は、もう意識なんてほばなかった。

「帰ろう・・・」

そう言つて、帰つたのは覚えてる。でも、あいつの表情も、そのあとの帰り道の様子も全く覚えてない。気づいたら、布団で泣いてたよ。

その後、友達にその話をしたら、言われたんだ。

「お前、それOKって意味だったんじゃないの？」

つて。まさか、と思った。年上と付き合おうと思ってるって意味だろ？つて。でも、よくよく考えたら、ひよつとして？みたいな期待が出てきたんだ。だから、ちゃんと確かめよう。もう一度、今度は顔を合わせて、告ろうと思つたんだ。一度振られたようなもんだから、もう怖くないつてさ。

そんな時、ちょうどクリスマスに会おうつて言われた。嬉しかった。部活が終つて、速攻帰ろうとした。

帰り道・・・俺は、ヤンキーにカツアゲされてる同級生を見つけ、そのヤンキーをボコボコにして、警察に捕まつた。

解放されたのは、約束の時間から3時間経つた後。ただ、メールでごめん行けなくなつただけ伝えた。それから、連絡もシカトして・・・今に至るって感じさ。

「・・・なんで？なんで、シカトしたの？そんな、カツアゲなんて無視すればよかったのに・・・」

なんで・・・だろうな・・・俺にも、わかんねえよ・・・

第二部『過去』〜4〜（後書き）

今回で、本作品を凍結することに決めました。

理由は、単純に書けないからです。

申し訳ありません。新しい試み等、やめればよかったと反省しております……

次回作は、一応検討しておりますが、恋愛モノではないことは確実です。

今このメッセージを読んでくださっている方々には、是非そちらを読んでもいただきたいと思っております。

それ以降、自信が戻りましたら、改めて書きを書くなり、書き直したりしたいと思っております。

では、いらっしやらないと思いますが、愛読されていた皆様方、大変申し訳ありませんでした……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2344d/>

恋に愛されない男

2010年11月25日02時49分発行